

地域再生計画

1. 地域再生計画の名称

“海に学び、海を活かす”海の駅づくりによる中核海洋都市の再生計画

2. 地域再生計画の作成主体の名称

奄美市

3. 地域再生計画の区域

奄美市の全域

4. 地域再生計画の目標

奄美市は、鹿児島県本土から約380kmに位置し、全国の離島の中でも沖縄本島、佐渡島に次ぎ3番目に大きい奄美大島の中核都市である。本市は、平成18年に、それまでの名瀬市、住用村及び笠利町の新設合併により誕生し、人口約5万人、市域面積305.92km²で、全国でも稀な飛び地での合併となっている。

本市を含む奄美群島においては、近海を流れる黒潮の影響を受け、温暖・多湿の亜熱帯性の気候条件にあるとともに、悠久の歴史により育まれた豊かな自然環境を有しており、国の特別天然記念物として最初に指定されたアマミノクロウサギのほか、ルリカケスやオオトラツグミ等の鳥類、リュウキュウアユなどの魚類など稀少な野生動植物をはじめ、本地域を生息の北限とする豊かな生態系を有している。また、本市を含む奄美群島においては、鹿児島県と沖縄県、さらには東アジアに連なる琉球弧の中心に位置し、「道の島」と称され、日本の海外交易における海上の要衝であった。そのため、本地域においては、様々な文化が融合した、独自の文化や歴史、生活習慣を培ってきている。島唄や八月踊り、スローライフ的な生活スタイルは、「癒やし」や「健康」への国民志向が高まる中、大きな脚光を集めているところである。その一方で、本地域は、古くは琉球王朝をはじめ、薩摩藩により支配され、太平洋戦争終戦後には、沖縄・小笠原とともに、連合国軍の統治下に置かれるなど、国内でも類を見ない「圧政の歴史」を辿ってきている。このように、明と暗の歴史の側面を有している点において、本市はもとより、奄美群島は特異な地域であるといわれている。

さて、本市は、ハブ空港である奄美空港と重要港湾名瀬港を有しており、まさに奄美群島における、人・物流はもとより、観光産業をはじめとした各種産業の拠点都市であるといえる。また、情報通信網の整備が進み、外海離島の地理的不利性を克服するための新たな取り組みも進められているところ

である。そのような中においても、動・静脈物流における海上輸送が大きな割合を占めているところである。しかしながら、本市における海上輸送、ひいては港湾の重要性に対する地域住民の意識は希薄になってきている。

奄美地方の方言では、「集落」を「シマ」と呼ぶが、これは急峻な山々を有する奄美大島において、わずかに平地となった海岸付近に集落が形成され、海伝いに集落を行き来したことの名残であると言われている。本地域においては、琉球・大和の中間として、また国際交易の要衝として、様々な文化の交流する土地であると同時に、地域間の交流も海からもたらされるものであった。そのことを顧みるとき、住民の生活と密接に関わり、文化交流の拠点であった「港」の歴史的意味合いは非常に大きい。

さらに現在では、クルーズ観光業界が活況を帯びる中、豊かな自然環境と、独自の文化を有する本地域においては、魅力的な寄港地として大きな注目を集めているところである。また、国際化が進展する中、九州地方の持つ東アジアに対する地理的優位性は大きく、今後、クルーズ観光受け入れについても、東アジアをはじめとした国際的な対応が求められているところである。

このような現状を踏まえ、「海」と「港」を地域活性化のキーワードとして捉え、「海」から受けた宝、すなわち長い歴史の中で培った文化や伝統を生かしながら、交流ネットワークの形成に向けた現状と可能性を、市民とともに「知り」そして「学び」、新たな交流と地域振興のための具体的な方策を探りながら特色ある発展（活用）につなげることを目標にする。

(1)「海」をキーワードとした「地域の誇り」の創出

本市の歴史を学ぶ上で、「海」は欠かすことのできない重要なキーワードである。鹿児島県本土と沖縄県の間位置することから、「道の島」と呼ばれ、日本の歴史的な交易上、大きな役割を担ってきた。過去の繁栄の歴史や将来にわたる「海」の持つ可能性を、生涯学習を通して多くの市民に啓発し、本市の有する「地域アイデンティティ」の再認識を図ることにより、地域住民に対して、新たな「地域の誇り」を創出する。

(2)「癒やし」をキーワードにした、海洋型観光産業の振興

本市は、重要港湾名瀬港を有しており、名瀬港においては平成16年4月に観光船専用の3万トンバースが供用開始されている。豊かな自然環境と独自の文化及び生活スタイルを活用し、クルーズ観光で訪れる観光客に大きな評価を得ているところである。また、誘致にかかる取り組みは、国土交通省が進める「みなと観光交流促進プロジェクト」のモデル港に選定されるなど、全国から注目を集めている。さらに、毎年8月に行われる「奄美まつり」の「舟こぎ競争大会」は、会場を名瀬港とし、参加団体は200を超え、多くの市民が参加する夏の風物詩となっている。

今後は、豊かな自然環境と独自の文化・生活風習を有する本市の「癒やし」を核とした観光産業の振興のもと、クルーズ観光の誘致を一層推進するとともに、「舟こぎ競争大会」を中心とした海洋イベントのますますの充実を図り、市民・観光客ともに海に親しみ、自然に親しみ、心身ともに癒される独自の観光振興を推進する。

(目標)

- ・ 「海を学ぶ、港を学ぶ」研修会の参加者 50人(5年間)
- ・ 過去の繁栄に学ぶ意見交換会参加者 100人(1回)
- ・ 港マップの作成・配布 1000部(5年間)
- ・ 計画協力“海会員” 200人(団体含む)(5年間)
- ・ 港ウォーキング大会の参加者 150人(1回につき)
- ・ クルーズ船誘致 30回(5年間)

・ 利用ネットワーク計画の策定

重要港湾名瀬港を中心に、点在する港湾のネットワークを形成するとともに、港湾の持つ生活密着機能と、観光及び地域振興に寄与する地域興し型機能の両側面から、利用ネットワーク計画を策定する。これにより、観光産業をはじめとした各種産業の振興と、集落活性化による地域振興を図る。

5 目標を達成するために行う事業

5 - 1 全体の概要

奄美市は、古来、「道の島」と呼ばれ、海上の要衝として栄えてきた。しかしながら、近年では航空路線の拡大等、社会環境の変化に伴い、海上交通や港湾の重要性に対する住民の意識が希薄化してきている。そのような中、NPO法人「ポートタウンあまみ」を中心に、市民と行政の協働により、市民に対して、これまでの海との関わりの歴史と「港」の持つ意義の再認識を図り、「地域への誇り」を喚起する。

また、現在多くの港湾が整備され、集落における生活密着機能が十分に発揮されているところであるが、重要港湾名瀬港を中心に、「港」の持つ地域興し機能を発揮するための、新たな利用ネットワーク計画を策定する。さらに、本市が進める「癒やし」を核とした観光産業の振興に大きく寄与するクルーズ船観光の誘致を推進するとともに、市民との協働による「海」や「港」を活用したイベントの開催により、地域振興を図る。

これらの取り組みとともに、国が進める「ヴィジット・ジャパン・プロジェクト」と呼応し、本市が有する観光船専用の3万トンバースの整備を促進することにより、南北600kmに及ぶ琉球弧の海洋中核都市としての地域振興及び産業振興を図る。

5 - 2 法第4章の特別の措置を適用して行う事業

該当無し

5 - 3 その他の事業

5 - 3 - 1 地域再生基本方針に基づく支援措置による取り組み

地域再生に資するNPO等の活動支援(内閣府): C2001
市民活動団体等支援総合事業(モデル活動支援事業)

「海」と「港」をテーマとした新たな地域振興を図る前提として、本市の有する歴史・文化を再認識し、住民の「地域への誇り」を喚起するとともに、地域活性化への可能性を検証するため、NPO法人「ポータウンあまみ」が主体となって、以下の事業を実施する。

(1) 港を拠点基地とした島内外の利用ネットワーク計画の策定

外海離島に位置する奄美群島において、本市は古くから奄美群島における人・物流の拠点都市として発展してきた。その発展の中核を担ってきたのが、海上輸送であり、港湾であったが、現在、航空路線の拡大や情報通信網の整備により、住民の海上交通及び港湾に対する重要性の意識が希薄化してきている。

そのような中、港湾の有する地域発展に果たす可能性を検討するとともに、その重要性と歴史的価値の再認識を図るため、NPO法人「ポータウンあまみ」を中心に、産官学の連携による、ポータウンネットワーク協議会を設置し、現在における港の活用状況を調査し、新たな活用方法を探るとともに、地域に点在する漁港等をネットワーク化し、効果的な利用計画の策定を目標とする。

また、港湾の果たす生活密着機能とともに、クルーズ観光等を中心とした地域興し機能の可能性を検討し、地域活性化の拠点づくりを図る。

(2) 国際化に対応した「港」のあり方及び過去に見る繁栄の検証と活用研究調査

本市においては、重要港湾名瀬港を有し、クルーズ観光において高い評価を得ているところであり、今後、さらに多くの誘致を図るためには、国際化への対応が必要不可欠である。また、国際化への取り組みを進める中で、古来、海上の要衝として栄えた「みなとまち」としての繁栄を検証し、現代における効果的な活用方法の調査研究を推進する。

(3)「海を学ぶ、港を学ぶ」研修会及び情報活動の実施

近年、航空路線や情報通信網の拡大に伴い、人・物流の拠点である海上輸送の重要性に対して、多くの市民の意識が希薄になってきている。しかしながら、本市における「海」・「港」の歴史的価値は高く、大きな学習的価値を有している。現在、本市においては、英会話や手話教室、ヨガ教室など、多岐にわたる生涯学習講座を開催し、1,500人以上の市民が参加しているところであるが、この生涯学習活動を活用し、子どもから大人まで幅広い世代に「海」や「港」の歴史及び役割に対する学びの場を設定し、その価値の再認識を図る。さらに、港湾を「環境学習施設」として確立するとともに、本地域の世界自然遺産登録に向けた活動の一環として港湾を核とした環境学習の取り組みを全国に発信する。

また、学習活動の一環として、市民及び観光客に向けた港マップを作成し、観光振興の一助とするとともに、港湾施設を中心としたウォーキング大会やサイクリング大会を実施し、多くの観光客や市民参加による地域活性化を図る。

5 - 3 - 2 支援措置によらない独自の取り組み

クルーズ観光船の誘致による観光産業の振興

本市が位置する奄美群島においては、豊かな自然環境と独自の歴史や文化及びスローライフ的な生活習慣を培ってきており、国民の健康意識の高まりとともに、「癒やしの島」として注目をされているところである。そのような中、本市は「癒やし」を核とした観光産業の振興に努めており、その中核をなすのがクルーズ観光誘致による海洋型観光の振興である。重要港湾名瀬港の有する観光船専用バースを活用し、停泊型のクルーズ船誘致を推進し、一層の観光振興を図る。

「海」を活用したイベントの開催による地域振興

外海離島に位置する本市は、急峻な山々の中、海に面したわずかな土地に集落を形成しており、海の彼方に神々の住む豊穡の国があるとする「ネリヤカナヤ」の思想など、「海」との深い関わりの中で生活を営んできた。現在でも、本市で開催される「奄美まつり」や各集落でのイベント等においては、本地域に伝わる「アイノコ船（本土に伝わる板付船と沖縄地方に伝わるサバニ船の技術を融合した奄美地方独特の船）」を利用した「舟こぎ競争大会」など、海と接する生活の中で育まれたイベントが親しまれているところである。

近年、多くの観光客の来島要因となっているマリンスポーツのさらなる振興を図るとともに、地域の特徴をいかした「日曜市」の開催や、

「浜下れ(集落民が海岸におり豊穰に感謝する地域行事)」等の伝統行事を活用することにより、市民との協働によるイベントを推進し、本市が有する自然環境や潜在的な観光資源のPRを図り、観光客のさらなる集客につなげ、観光産業の振興による地域の活性化を推進する。

6 計画期間

平成18年度から平成22年度まで

7 目標の達成状況に係る評価に関する事項

目標の達成状況については、ポータルネットワーク協議会を設置し、評価を行うが、幅広い観点から評価・検討を行うことができるように、ホームページ等を活用し、その取り組みや成果を広く公開するとともに、学識経験者及びイベントの参加者から意見を徴するものとする。

8 地域再生計画の実施に関し当該地方公共団体が必要と認める事項

該当無し